

# 「名所・旧蹟」観についてのノート

（幕末における知識人を素材に）

武知正晃

## はじめに

現在、京都は国際的な観光都市として存在している。そして、観光都市としての目玉は、奈良と同様にその歴史の古さである。「歴史と伝統のある京都」、「日本のふるさと」などという観光パンフレットにあるキャッチフレーズは日本ならず世界においても確固とした認識を得ているといえよう。京都への修学旅行も日本の歴史と伝統を学ぶということがその目的となっている。

さて、近年このような「歴史と伝統」というようなキャッチフレーズのかなりの部分が、明治初年の旧慣保存などを通じて「造られた」ものであることが指摘されている。<sup>①</sup>このような視点に立つ研究の功績は、現代の我々があなたも連綿と受け継いだかのように思える伝統行事やそれをめぐる意識のかなりの部分が、実は近代化の過程で、西洋化の影響をつけながら造りあげられたものであることを明らかにした点である。

しかしながら、近世の段階において京都がすでに「観光地」として認識されており、多くの観光案内書が出版されていたことも事実であり、京都の史蹟や名所への意識が単純に近代化の過程で創造されたということとはできない。問

題は、近世における京都への意識、とりわけ歴史的な名所・旧跡への意識が、近代へどのように継承されるのか、しないのかという点が重要である。「伝統の創造」という視点は近代になりある意識が造られるといった単純なものではなく、様々な事象をめぐる文化的な位置がどのように再編成されたのか、という点が重要なのである。したがって、必然的に近世と近代とを時代横断的に議論を進めていくことが必要となる。京都の名所・旧蹟の意識について言うならば、明治天皇の東京遷都により京都はその地位を大きく変容させていくが、この前後において京都への意識がどのように編成替えされるのかを考察する必要がある。本稿では、このような問題を全面的に論じるものではないが、幕末における知識人の日記を手がかりに、この問題に関する糸口と素材を提供することを目的とするものである。

## 一

本稿では加藤有隣と清河八郎の残した日記をもとに考察をすすめていく。まずは加藤有隣からである。加藤は一八一(文化八)年に水戸藩士佐藤政祥の子どもとして、水戸城東下市濱田村に生まれる。一八一七(文化一四)年に、笠間藩士加藤信義の養子となり、一六歳の時、藩校時習館の副都講となる。その後、一八三〇(天保元)年一〇月、会澤伯民(正志斎)の門人となり、この前後三年にわたり藤田東湖の家にも寄寓し、水戸学を学ぶことになる。一八三八(天保九)年には、江戸の昌平校において、林述斎、佐藤一斎らに詩文の添削などを受け、その一方で国学を平田篤胤に学び、兵学と砲学を清水赤城に学んだ。

一八四四(天保一五・弘化元)年、笠間藩の政争に巻き込まれ、しばらく不遇な扱いを受けるが、一八五八(安政五)年には、藩外に出ることを許され江戸に登り、尊皇攘夷派と接触を持ち活動することになる。この時に加藤が密接な関係をつんだのが長州藩の尊皇攘夷派であった。一八六三(文久三)年に、加藤は出府願いを認められ、京都に登ることになるが、加藤が笠間の地を離れることができたのも長州藩の尊皇攘夷派勢力が笠間藩に働きかけたことが

大きな影響を与えたとされている。

さて、文久三年に京都に上洛した加藤は京都の「名所・旧蹟」を積極的に回ることになる。加藤はこの年の二月十一日に京都に到着するが、十三日には早速、祇園・建仁寺・清水寺を訪れている。十五日には、宿泊していた三条から御所・二条城の近所を通り、太秦の広隆寺のそばを通り嵯峨野をとおって嵐山の天竜寺を訪れている。天竜寺を訪れたのはここが長州藩の本陣であったからである。天竜寺からの帰路、常磐村にある常磐御前の墓を見学し、その後小鳩寺 妙心寺 北野天満宮を通り、三条の宿舎へと戻っている。一七日にも嵯峨を訪れ、一九日には嵐山を訪れている。二月二十一日にも加藤はふたたび嵯峨野方面に足を運ぶ。この時の行程を見てみよう。この日は先ず、龜山天皇・後嵯峨天皇の天皇陵 嵐山 渡月橋 野々宮 天竜寺という経路であった。なお、此の日天竜寺の寓居を出て、車折神社近くの洛西三十三番札所の観音堂の中に引越している。二十六日には、北野天満宮 平野神社 仁和寺 等持院 金閣寺を見学し、車折神社・落柿舎を訪れている。三月三日には、太秦の広隆寺・木島明神、三月八日には、知恩院・双林寺などを訪れている。

このような点ばかりを見ていくと、加藤が物見遊山のために上洛したかに見えるが、加藤の上洛の本当の目的は、古来からの古式に則った学校の建設にあった。そのため、加藤は長州藩士をはじめとして、当時京都に上洛していた各藩の藩士・公家たちと盛んに接触を持っている。したがって、正確には加藤の第一の目的を果たすためのいわば口ビー活動の合間に名所・旧蹟をまわっていたと言った方が適切であろう。この他には、藤森神社・東福寺・伏見稲荷・石清水天満宮などを訪れている。

次ぎに清河八郎の場合を見てみよう。清河八郎は一八三〇（天保三）年に、出羽国庄内田川郡清川村の素封家斉藤家に生まれた。昌平校に入学する際に「清河」の姓を名乗り清河八郎となる。これから分析の対称となる紀行文『西遊草』は、安政二年に八郎が長年の親不孝の償いとして母親を伊勢参りの旅へと連れ出した時にしたためたものである。<sup>④</sup>

安政二年の三月二十九日から九月一〇日までの道中の出来事を記したものである。加藤との比較をするために京都方面を訪れた時の記述を見てみよう。清河はこの年に二度京都を訪れている。一度目は五月五日に宇治を通り、京都に入り、藤森神社の祭礼を見学している。五月七日には北野天満宮・大徳寺などを見学して八日に大坂に向かっていく。二度目は西国方面を旅した後、六月五日に舟で大坂から京都に入っている。清河一行の京都での行程を見てみよう。六月五日、舟で京都に入った清河は祇園祭礼の鉾を見ている。六月七日は、ふたたび祇園御祭礼を見た後、昼過ぎに清水寺に行き、本能寺・東山知恩院などを見学する。六月八日は暑さに耐えかね一日静養し、翌日六月九日は、西本願寺 飛雲閣 本国寺 東寺 六孫王権現 西大谷寺 六波羅密寺 建仁寺と見学する。六月一〇日は、東山見物に出で、安井の金比羅 高台寺 長洛寺 双林寺 知恩寺と見学する。六月十一日は、近江八景見物に出で、唐崎に宿をとる。翌日一二日は、延暦寺などを見学して、白川越で京都にもどり、葵の社 銀閣寺 吉田社 真如堂 永観堂と見学する。一三日には東本願寺・鳥原を訪れている。一四日には祭礼見物を行い、一五日には、大徳寺 金閣寺 等持院 仁和寺 嵯峨寺 嵐山など洛西方面を訪れている。翌日一六には丹波に旅立つことになる。

清河の史蹟訪問の一つの特徴は、母親との旅である点である。八郎は京都で『都名所図絵』を買い求めているが、この時の行程は八郎個人の希望よりも母親の希望を優先したものとされる。したがって八郎が訪れた場所はいわゆる当時の観光コースをたどったものと推測される。また、京に滞在した加藤と比べて、八郎の場合はあくまで旅の途中であり、短期間に集中して名所・旧蹟をめぐっている。

両者が回った名所・旧蹟や見学した祭礼などを見ていくとかなり重なっているものが多いが、次節では両者の名所・旧蹟・祭礼に対する意識の差を中心に見ていくことにしよう。

加藤、清河ら二人のおとずれた京都の名所・旧蹟を見てきたが、本章では二人がこのような名所・旧蹟の見学をへて、それに対してどのような視線をむけたのかを見てみることにしよう。先ず、清河の場合である。清河は京都の代表的な祭礼である祇園祭を見て次ぎのように述べている。

凡て祇園礼会はとにも「かくにも」天下第一の美なる事ゆへ、中々一時の見物にて尽く知尽す事はとても参らぬ事にて、委しき事は『都名所図絵』等にて見るべく、されども東都辺の祭礼とちがひ、人氣柔弱にてさらに競ひにぎをふ事まれにて、ただ古物見物するのみにて、張台の抜たる祭礼なり。殊に常年同じものばかりいだすゆへ、悪口いたす時は、錦繡古物の虫乾を見る如にて、かほどの祭会にはをしき事なり。若ケ様なる祭会をして東都にあらしめば、是三国一の祭となるべく、素より鄙弱の気なる京都のうへに、例年同じ事なれば、自然とこも飽き、ゆるみゆく、是れ勢ひなり<sup>⑤</sup>

ここで八郎も祇園祭りの祭礼の美しさは認めている。しかしながら、とにかく京都の祭礼が「人氣柔弱」である点を強く批判する。祇園の祭礼では古い古物を見せるのみで、そこに革新的な新しさを創造することは何も無い。八郎にとって、いかに古い物であっても「人氣」の勢いがかけている京都は何の魅力もないものであった。ここには「士」に無条件で価値を見いだす意識は存在しない。このような見方は彼の歴史観と関係する。八郎は次ぎのように述べる。

つらつら天下の事を考るに、西よりひらけたるは我国の形勢故、関東は抑太平已来の繁華なり。太田道灌の頃は武蔵野といひて人家も稀なる郊原なるを、徳川家御入府の已来、遂天下第一の勝地と相成<sup>⑥</sup>。

日本はそもそも西から開けた国であり、関東の繁栄は徳川幕府以降のことにすぎないとする。しかし逆に八郎は徳川家康の関東入府以来の繁栄にすこぶる自信を持っているのである。したがって、八郎の京都への評価は非常に辛いものになる。八郎は次ぎのように述べる。

京師は高位貴官の在る王城にも似合す万事軽薄鄙吝を専となし、何事も陰等に事をはかるふ故、遂弁舌のみ工みと相成、内外大小相違するなり。それ故近辺のうわさにも「京の弁舌」といひて、人を欺くの習ひと相成、歎ずべきの至りなり。其故男児らしき英偉磊落の気風はさらに無し<sup>⑦</sup>。

八郎にかかつては、京の歴史も伝統も形無しである。彼にとって意義のあるのは今の「勢」なのであった。連続しているだけの「歴史」は彼にとっては評価の対称ではなかったのである。八郎にとっては、「江戸は京師程の古跡はあらざれども、神社仏閣の多きは、格別京都に劣るべからず。殊に歌舞のにぎわひといひ、茶店の綺麗といひ、誠に天下無双の地」と今や「勢」は江戸にあるのである<sup>⑧</sup>。

これに対して、加藤の京都の名所・旧蹟への意識はどのようなものであったのであろうか。加藤は、京都の地について次ぎのように述べる。

花洛の境、何れも只ならぬ霊地のみにて、東西の端々迄も、實に住みはつべき處のみこそ多けれ。東は東山、西

はさかの・松尾のあたり、北は紫野・加茂の御山、南は藤森・伏見の里、いづれもめでたき處にて、先、さかのあらましを云ば、龜山は天皇の御幽栖、嵯峨天皇の御離宮（大覚寺の宮）いとまかしこく、定家卿の小倉の山荘、西行が庭、寂蓮法師が我庭は都の乾よみし處、妓王妓女、仏御前の旧跡、小督局が幽栖のあと、冷泉朝臣が知還軒、中書山の山荘、嵐の山のふもと寺、慈鎮和尚、涌蓮法師等の庵のあと、近くは芭蕉宗祇の住る跡、望月狭々野屋跡、細川常光の茶室など、古人のすめる跡さへ尽しがたく、たとへ爰に身を終りぬ共、恨なかるべしと思へば、かりそめの住居乍も、明日は東山の辺りに移らむと心づかひのせらるるも、いといと立うく覚へ待るばかり也<sup>⑩</sup>

加藤にとつては京都の境の地は「靈地」であり、「めでたき」場所であるとされている。その理由は、京都には歴史上の「古人」とゆかりのある地が無数にあるからである。このように加藤の過去へのこだわりは、加藤の上洛の目的とも関係しよう。加藤の目的は、「只々積年学び得たる唐の大和の正しき道もて、都の内に大学をひらき、我道の衰へたる本を正して、神典を再興し、兼ねて江戸にありける比より契りし周布君に心を合せて此事を果し、且は我君にも契りおきし式社再興の業を終りて、皇国の神恩に報ひ奉らむと思ふのみ」と述べている。また、加藤が長州藩に出した建白書には、神道の復興・沿岸の防衛・海軍局の創設などの海防論・文武の諸官制の整備の他に、「近郊にて、地形を選び、大学校御造律、古制を増し、御規模を御立被成」と、京の地に大学を再考し、日本の古代の制度を復興する必要があるとしている<sup>⑪</sup>。ここでは、加藤の「近郊にて、地形を選び」という言葉に着目しておこう。大学はどこに建築してもいいわけではない。京都の近郊にあることが重要なのであった。

このような加藤の認識にたてば、清河とはことなり京都という特定の場所が重要となる。清河のように、「勢」によって左右されるものではない。京都という場所や、そこにある「古人」とゆかりのある地は絶対的なものとなるの

である。その事例を見てみよう。加藤は京都に来て天皇の陵墓を初めて見学することになる。その時のことを日記に次のように記している。

畏くも初めて山陵と云御処に拝謁す。こは、龜山天皇の御山陵の由。陵の上に松桜など植込て、御玉垣は小さき松の若ばひに黒き御門有り。廻りは雑と溝をほらせり。こは元寇の時、御徒跣にて、風の神など祈らせ玉ふ御聖主にましますを、今日初て拝み奉る。かしこしなんと云計りなく、首も土につきぬく斗りの心地せり<sup>⑬</sup>

ここでは、元寇の時の天皇であった龜山天皇の陵墓を訪れているが、加藤は元寇の時の龜山天皇の行動に対して感嘆している。そして、この過去への感嘆は、同時に文久三年という切迫した時勢と密接にリンクしているものと思われる。加藤の龜山天皇への感嘆は、同時代の天皇や為政者たちへ同様のことを期待することになるからである。同様の事例を見てみよう。加藤が藤森神社を訪れた時の感想である。藤森神社は現在でも五月に行われる競馬で有名であるが、神功皇后と関係の深いことも有名である。加藤はこの地を二度訪れているが、一度目は祭礼の行われる前である。その時のことを加藤は次のように記している。

只藤の森、是も神后三韓征伐御勢揃ひの御跡と兼て聞くに、尚も亦日本紀を書玉ふ舍人親王も御同殿に祭られしと、兼て聞きしも嬉しく、尋ねてよるにこは如何に、神后に御旗を立てさせ給ふ古跡ぞと<sup>⑭</sup>

神功皇后の古跡に感動する加藤であるが、加藤の日記を見ると、神功皇后の史蹟に触れるたびに感想をしるしているが、加藤のこのような関心は、神功皇后伝承が日本の武威を示す伝承として堅く理解されているからに他ならない。

五月の祭礼の見学のためにふたたび藤森を訪れ、祭礼の行われた翌日六日に、藤森神社の神庫を訪問して、「神后征韓の御甲冑」を見学している。近世に作成された『都名所図絵』にも藤森神社は神功皇后との由来で紹介されている神社である。ここでは、神功皇后の旗塚や元寇の際に早良親王が戦勝を祈願したこと、五月五日の祭礼がこの早良親王が戦勝祈願した日にちなんだものであることなどが述べられている<sup>15</sup>。加藤が長州藩に献上した建白書の中に海防に關係する項目があるが、加藤が神功皇后伝承とゆかりの深い神社に関心を向けるのと、文久三年の対外情勢とは密接に關係するものとおもわれる。加藤にとっては、名所・旧蹟は常に現実との關係の中で呼び起こされていくのである。

### 三

前章で見たように、二人の京都への意識は対称的である。一見すると、京都の歴史的なものに重きをおく加藤の意識は、現在の京都に対する意識へとつついていくように思える。しかし、ながら単純にそう言えるのであろうか。もう一度、清河の発言をみてみよう。

をよそ天下に於て興廢存忘の多きところは京都にしくはなく、桓武天皇開闢已来尚御世にいたる迄争乱の絶間なく、神社仏閣といへども、或は破壊せられ、或は焼失にあひ、歴代ごとに一変せざるなし。故に古跡を尽くさくらんと欲するときは、中々一朝一夕の及ぶところにあらず。故に平常の遊人にてはともつくしがたく、ただ、あらましをさぐるのみなり。吾は数度あそび来り、しばしば見物、且古事を按じるゆへ、大概はつくしたりとも、母ははじめての事ゆえ、又々連れさぐり、あらましをさぐり尽したるゆへ、是より丹州天橋立を極めんと外連のものにも辞し、弥明日の発行とさだめぬ<sup>16</sup>

この文章から先ず確認しておきたい点は、清河は決して歴史を無視しているわけではない。清河自身何度も京都の地を訪れて、神社仏閣を見ているのである。問題はその見方である。清河によると、京都は、歴史的な起源こそは古いが、度重なる戦乱により、神社仏閣はすべて興廃してしまっているとす。このように加藤は京都の神社仏閣の歴史の中に歴史的な断絶を見いだしていくのである。二つ目に確認したいのは、「平常の遊人」と自分との格差である。この時期には、京都や各地の名所・旧蹟を見学する人は多くいた。しかし、清河は一般の人々の名所・旧蹟めぐりと自分の名所・旧蹟への洞察力との間に明確な距離を見いだしている点である。清河にとって名所・旧蹟についての「本当」の歴史や深い洞察は何度も足繁くかよつてのみ身に付くものであった。『都名所図絵』を片手に一度や二度の旅で身に付くものではないのである。この清河が意識している距離感について、『西遊草』の巻末における彼の発言を見てみよう。

すべて道中の事は憂多くして楽しみすくなきものなれども、家内へ帰り来るのちは、憂ひ却て楽しみと相成ものなれば、我記するところの事を案じ、一世に一度は必ず伊勢いたさるべきなり、されども道中の疲れをしのび、孤燈にもとにて思ひのままでしたためたる此『西遊草』なれば、大人見識の見るに供するにあらず。但児童、小婦に伊勢参ばなしに、旅中のあらしをさとさんために、しるしおくのみ<sup>①</sup>

ここでは『西遊草』に記していることは、「大人見識」を持つ人々へのものではなく、「児童」「小婦」の為のものであると述べている。この発言でもわかるように、清河にとりある一定の知識を身につけた「大人」を対象とした話と「児童」「小婦」の物見遊山のための話とは明確に区別されていた。清河にとり、「児童」「小婦」は同じ知識を持つべき対象ではなかったたのである。

それでは、清河が述べるような明確な区別について、加藤の場合はどうであろうか。清河と加藤の京都への視線はこれまで見たように対象的であるが、この点についてはどうなのであるうか。残念ながら、この点について加藤は清河ほど明確には述べていない。加藤の記述の特徴からこの点について類推するしかない。加藤の日記には一般の人々の記述がしばしば登場する。しかし、加藤の記述の中でそれら一般の人々を批判的に捉える視線はひとつもない。一例を挙げよう。加藤が龜山天皇の陵墓を見学した後、嵐山を訪れている。その時の光景を次のように述べている。

夫より数百歩、西北なる山上の二亭に上れば、嵐山の花は、目前にて大井川の清流は、脚痕をひたす斗りなり。眼底藍の如く流るるに、筏を組て棹させる有様、花筏の事も思ひ出でらる。(中略)山下に下がれば、大井川に上、嵐山の花見茶屋、雨も今日は晴れ、花も盛りと、遊客をもてなす為めに、川上に茶屋酒店すきまもなく並立て、床を構ふるあり、火を吹くあり、食を炊くあり<sup>⑧</sup>

ここでは、春の花見の季節に遊山客を迎えるための嵐山の景色が描かれている。この嵐山を訪れる前には、龜山天皇陵を訪れ元寇の歴史に思いをはせていた加藤であるが、ここでは時局とはまったく関係のない一般人の風景を淡々と記述している。加藤は、京都において尊皇攘夷派の志士と時局について議論することが多かった。しかし、その議論の場から一步外にできれば、そこはペリー来航後いかに切迫したとはいえ京都の日常生活があった。加藤は日記にこの嵐山の風景の記述と同じように、祇園の芸子やにぎわいを淡々と記述している。おそらく、加藤にとりこのような京都のごく普通の生活を送る人々、京都に遊山で訪れる人々は批判の対象でも啓蒙の対象でもなかったのではないか。

このように、清河の発言や加藤の記述の仕方をみるならば、名所・旧蹟をめぐる意識に関して、二重構造 知識人

と「児童」「小婦」との間での「が存在していた」という仮説をたてることが可能ではあるまいか。清河と加藤の京都への認識には大きな格差があった。しかし、この二重構造に着目すれば両者は実は同じ位置にいたと言えるのではあるまいか。

### むすびにかえて

明治維新を迎え、東京遷都に伴う天皇の東京への移動や廃仏稀釈による寺院の衰退などにより京都は一時期その活力を失う。しかし、やがて京都や奈良はいわゆる「古都」としての価値を全面に押し出しながら近代を迎えていく。このような京都・奈良の近代化に、明治初年の天皇巡幸が契機となった旧慣保存政策が深く関わっていくことになる。小稿では、その前段階について、清河八郎と加藤有隣の二人の知識人の京都の名所・旧蹟への視線の格差を中心としながら考察を加えてきた。その結果、二人の京都への視線には対照的な点があり、とりわけ清河の京都への意識は現代の我々の抱く意識とは全くかけ離れている点を指摘した。

それと、同時に清河八郎の場合、一般の人々とりわけ「幼童」「小婦」と自分のような知識人との間に明確な一線を引いていることを確認した。このことから、一つの仮説として名所や旧蹟に対する意識について二重の構造が存在するのではないか、という点を指摘しておきたい。おそらく幕末の段階において名所・旧蹟に関心を持ち、深く考察していこうとする意識は確かに存在した。しかしながら、このような意識は広く一般の人々を巻き込むものではなかった。近代国家が、学校教育などを通じて一般の人々までの歴史意識にまでに介入してくる段階とはその装いを異にしていた。このような幕末やそれ以前の意識がどのような過程をへて編成されていくのかが問題となるが、それは今後の課題となる。

## 注

- ① 理論的な研究としては、『ボブズボウム』造られた伝統（紀伊国屋書店、一九九二年）、実証研究としては、高木博志『近代天皇制の文化史的研究 天皇就任儀礼・年中行事・文化財』（校倉書房、一九九七年）、鈴木良・高木博志編『文化財と近代日本』（山川出版、二〇〇二年）などを参照のこと。
- ② 近世京都の「観光化」については、鎌田道隆『近世京都の観光都市化論』（『近世京都の都市と民衆』思文閣出版所収、二〇〇〇）などを参照のこと。
- ③ 加藤有隣については、埴瑞比古編『神陰年譜』（笠間稲荷神社発行、一九七九年）に掲載されている「加藤櫻老小伝」に簡潔な伝記がまとめられている。
- ④ 清河八郎の『西遊草』については、岩波文庫の小山松勝一郎校注『西遊草』を使用した。清河の略歴などは同書の解説を参照のこと。
- ⑤ 前掲『西遊草』二四二頁。
- ⑥ 前掲『西遊草』二八一頁。
- ⑦ 前掲『西遊草』二八一頁。
- ⑧ 前掲『西遊草』二八三頁。
- ⑨ 清河は「勢」という言葉をしばしば使う。彼の「勢」という言葉が近世の儒学的歴史叙述のあり方においてどのような位置を占めるかについては、別途検討したい。
- ⑩ 前掲『神陰年譜』九九頁。
- ⑪ 前掲『神陰年譜』八八頁。
- ⑫ 前掲『神陰年譜』一一八頁。
- ⑬ 前掲『神陰年譜』九二頁。
- ⑭ 前掲『神陰年譜』一一六頁。
- ⑮ 『新訂 都名所図絵』3（ちくま学芸文庫 一九九九年）五七～六四頁。
- ⑯ 前掲『西遊草』二九四頁。

- ⑰ 前掲『西遊草』五三三頁。  
 ⑱ 前掲『榊陰年譜』九二頁。

(追記) 筆者は、近世史専攻のため家根先生とは直接的な学問的な関係はなかった。しかしながら、学部学生の際に学芸員科目の考古学発掘実習を履修した時は、家根先生がその時の担当であり、大変お世話になった。発掘現場は岐阜県の飛騨高山近くの朝日村という場所であった。発掘の目的は、家根先生の研究テーマであった縄文農耕の実態を解明するためのもので、掘り出した土を篩いにかけて植物の種や農耕の痕跡を探し当てるといったものであった。その時、篩いにのこった一片の石器をとりあげて、その石器を加工する際の力のくわわる方向だとか様々な専門的な見地を非常に丁寧に説明してくれたのを覚えている。その後は、しばしば大学近辺の飲み屋で会う程度であったが、最後に会ったのも酒の席であった。調度その場に同席していた宮川康子氏が、家根先生に自分が東北で購入した縄文土器の鑑定を依頼した日であった。謹んでご冥福をお祈りしたい。

(本学文学部非常勤講師)